

日本神経科学学会 2018 年度の活動報告

日本神経科学学会（大隅典子・東北大学大学院医学系研究科・osumi@med.tohoku.ac.jp）

Activity Report in 2018, The Japan Neuroscience Society

The Japan Neuroscience Society

(Noriko Osumi, Tohoku University School of Medicine, osumi@med.tohoku.ac.jp)

日本神経科学学会は、脳神経系に関する研究の推進を目的に1991年に設立された団体で、現在約6200名の会員で構成されています。今期より旧男女共同参画委員会を発展的に解消し、ダイバーシティ対応委員会が発足しました。今年度の大会開催中の同委員会の活動について報告致します。

1. 子育て中の研究者の学会参加支援

本学会における過去5年間の年次大会参加者の男女比を調べたところ、女性の割合が23.9→24.8→26.5%→26.95.0%→27.01%とわずかずつですが、増加していました。特に20代の女性参加者がこの5年間で1.39倍に増えています。参加が増えている20代~30代女性が年次大会に参加しやすい環境を整備することは、女性が今後も研究活動を継続するために重要であると考えられます。本学会では2004年以来、継続して大会中の託児室を設営しており、今年のはのべ34名の利用がありました。子供と一緒に使える休憩室も設置しています。今後、ポスター会場の一角における親子スペースの設置等を含め、このような取り組みを次年度以降も継続する予定です。

2. 大会中のダイバーシティ対応委員会企画

ダイバーシティ対応委員会主催ランチョン企画「神経科学分野におけるダイバーシティ対応の推進にむけて」

オーガナイザー：大隅 典子（東北大学大学院医学研究科）；内藤智之（大阪大学大学院医学系

研究科）；西真弓（奈良県立医科大学）

神戸において開催された年次大会3日目の7月28日（土）にランチョン討論会を企画しました。比較的大きな会場にて、150名分のお弁当を学会予算より提供いただき、和やかな雰囲気の中で、まずオーガナイザーより企画の趣旨説明が行われました。その後、3名の若手神経科学研究者が女性、男性それぞれの視点から、具体的なキャリア形成過程における家族・パートナーとの別居に関わる問題について話題提供と問題提起を行いました。この企画は英語で行われたため、外国人を含む、幅広い年齢層の男女、約150名の参加がありました。昨年同様男性研究者からも多くの質問、発言があったこと、さらに今年は高校生が何名か参加してくれ、積極的に発言してくれたことが印象的でした。また、プレナリー・レクチャー講師の一人、CRISPR-cas9を開発された、米国カリフォルニア大学バークレー校のJennifer Doudna教授もご参加下さいました。

ダイバーシティ対応委員会としての活動も2年目に入り、学会長である伊佐正教授（京都大学大学院医学系研究科）より、日本で働く外国人研究者が増えていることなどから、宗教や食事など、多様性に伴い問題となる点を挙げてほしいとの要望がありました。来年の新潟の大会においては、日本で働く外国人研究者のポスドク後のキャリア形成の問題や外国でPIとして働く日本人研究者の問題について取り上げていく予定です。